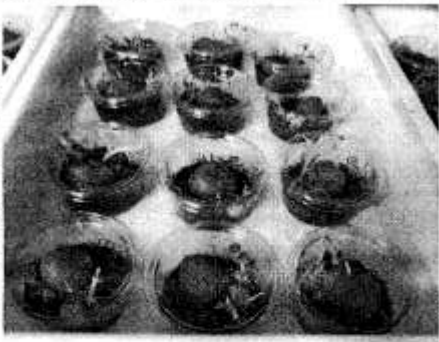


農業技術 プリズム

県内のバレイショ産地で問題となっている、ジャガイモシストセンチュウの拡大防止対策と防除対策を行うためには、圃場（ほじょう）ごとの線虫密度調査が必要です。これまで土壌か

プラスチックカップ検診法の有効性を検討



らシストを分離した後、シスト内の卵を取り出し、顕微鏡で卵の生死を確認していましたが、その方法では専用の設備と煩雑な作業、熟練の技術を要することから、あまり行われていませ

ジャガイモ圃場の線虫密度調査

暖地二期作栽培での カップ法有効性実証

んでした。

そこで、北海道農研センターで開発された「プラスチックカップ検診法（以下カップ法）」の暖地二期作栽培での有効性を検討しました。

カップ法は、透明のプラスチックカップに検診土壌と感受性品種「ニシユタカ」の小粒芋を入れて平均気温16〜24度の暗黒条件で60日間栽培し、形成されたシスト数をカップの外側から調査するだけで、非常に簡便であり誰でも診断が可能です。これまでの調査法では死んだ線虫を誤って計数するリスクがありました。カップ法では生きた線虫だけがシストを形成するため正確であり、検診にかかる作業時間も従来法が1検体当たり約60分かかると対して、カップ法は8・5分と約7分の1に短縮できます。さらに、カップ法では、検診が終了するまでカップのふたを開けることがないため、線虫に直接触れることなく、線虫の発生拡大のリスクを低減できます。

以上の結果から、長崎県の暖地二期作栽培においてもカップ法による正確な密度推定ができることが実証されました。（県農林技術開発センター・福吉賢二）